日建連建築セミナー開催報告
「中立点」から生まれる建築

日建連は、日建連建築宣言基本方針の「世界に誇れる未来の建築文化の創造」に向けた活動の一環として、毎年建築セミナーを開催している。セミナーには活躍中の建築家を講師にお招きし、日建連会員だけではなく、建築を学ぶ学生や設計業務に携わる若手に向けた講演及び対談を行っている。

今年度の講師は、ASの青木淳氏。「中立点」と題して十月十六日に東京証券会館ホールで開催した。青木氏は、京都市美術館（京都市京セラ美術館）（竣工二〇一九年、日建連表彰二〇二三第六四回BCS賞受賞）、ルイ・ヴィトン表参道（竣工二〇〇二年、二〇〇四年度第四五回BCS賞受賞）などを設計している。講演では現在進行中の松本平広域公園陸上競技場の計画や京都市美術館を紹介した。プロジェクトに紐づく歴史や背景、事例研究から導き出したコンセプトなど、設計プロセスについて解説した。会場には学生や社会人を含めた幅広い年代から多くの参加があり、アンケートでは約九七%の方から「大変良かった」「良かった」との感想をいただいた。

主体の間に生まれる存在

青木氏は、設計者として内から湧いて出てくるものをつくろうという思いはないという。また、クライアントや関係者など、世の中が望んでいるものをつくろうという思いもないと続ける。そのどちらでもない中立点にある架空の主体を意識しながら計画が形づくられていく感覚を大切にしているという。

現在進行中の競技場では、それぞれの競技に適した席や競技スペースの配置になることを目指し、周囲を均一に囲まない観客席やトラックの内側に配置した走り幅跳びの砂場など、慣例ではないが観客と選手の一体感が生まれるような提案をした。

京都市美術館（京都市京セラ美術館）についてAS の青木淳氏が説明する様子

共存と調和

青木氏は、京都市美術館の改修によってバランスを欠いた腰高の帝冠様式と新しい要素で馴染ませることを考えたという。

既存館前面の底部を掘り下げ、南北に伸ばしたメインエントランス「ガラス・リボン」から東西の貫通通路を設けた。ガラス・リボンの前は緩やかな傾斜のついた広場とし、舞台としても機能する。また、現代美術を展示する新館の外装には、遠景からは既存館と色が馴染むようなタイルを用いるなど、設計意図が主張しすぎない建築を成立させた。

京都市美術館（京都府京都市）

AIとの中立点

第一部の最後に、青木氏がキュレーターを務める第一九回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館展示の概要を紹介した。テーマは「中立点—生成AIとの未来」。人間と生成AI、素材の中立点を主体とし、新たな創造の可能性を探る構想を発表した。

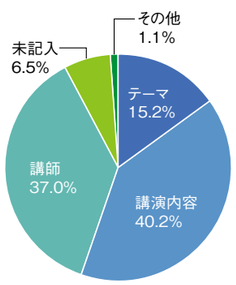
スタイルに囚われない姿勢

第二部は、賀持剛一建築設計委員長との対談。賀持氏からの「他の建築家と比べスタイルが固定されていない印象がある」という言葉に対し、「あえてスタイルを持たないようにしている。スタイルを持つとそれに閉じ込められてしまう」と青木氏は答えた。「前述の中立点にも通ずる姿勢を持ちながら、優れた作品を生み出しているのは新鮮で刺激的である」と賀持氏は感銘を受けていた。

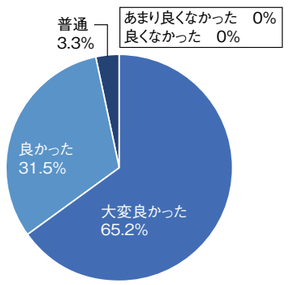
学生からの質問を受け、青木氏は、建築は空間をよりよい状態に変える行為だと述べる。「つくらない」アプローチも設計として可能性がある一方で、仕組みづくりに終始せずに空間で答えていく必要もあるという。答えのない状況が常であり、そのなかでもつくりながら考えていきたいと述べて締めた。講演の様子は、日建連のYouTubeチャンネルにて公開中である。

日建連のYouTubeチャンネルはこちら

セミナー終了後のアンケート結果



良いと感じた点



全体的な感想

アンケートコメント（抜粋）

- 中立点という抽象的な概念を、青木さんの自作、松本平陸上競技場、京都市京セラ美術館などを通じて分かりやすく展開された。特に柱のある競技場観覧席、走り幅跳びの位置がトラックと隣り合わせになっている点など新しい発見があった。
- 設計者が直面する意識の葛藤について、青木先生の作品を通じた取り組みを紹介いただき、共感と気づきを与えていただきました。また、生成AIに前向きに取り組み、設計への新たなアプローチを模索する姿勢に、大いに刺激を受けました。
- 普段お聞きすることが無い、ご自身の設計思想をお聞きできたことが大きいです。また、作品だけではなく、お人柄も非常に素晴らしい方なのだなと感じました。テーマ、講師、講演内容のどれも素晴らしいと感じました。